

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞  
(岡山県知事賞)

「 災害を理解するとは 」

岡山県立津山中学校 3年 なかがわ さくら 中川 桜

私の住む町は安全なところだ。周りは自然豊かな景色が広がり、遠くから美しい山々を眺めることができる。岡山県北部に位置するこの町は、台風の季節になれば時折強風に見舞われるが、とびきり近くに山があるわけでも、海が近いわけでもなく、地震の影響も受けにくい場所だ。家の近くには川もなく、自然災害の起こりにくい地域に私は住んでいる。だからといって、災害の心配を何もしていないというわけではなく、もしものために家族で避難場所の確認や避難バッグを用意していた。私は自然災害を十分に理解していると思っていた。いや、思っているつもりだった。

夏らしい暑さがじわじわと近づいていたころ、平成30年7月豪雨、通称、西日本豪雨が発生した。これは当時ニュースでも大きく取り上げられた、西日本を中心に続いた集中豪雨だ。この豪雨で死者は250人以上にも上り、平成最悪の水害とも報じられるほどだった。岡山県だけでも14000棟以上の住宅に被害があり、広島県では5000箇所以上の土砂災害が起きた。この時、複数の県に特別警報が発令され、岡山県もそのうちの1つだった。幸いにも私の家に大きな被害はなかったが、テレビにでかでかと書かれたその文字の並びに大きな不安を感じ、怖かったのを今でも覚えている。

雨が通り過ぎてから数日後、私は母と夕飯を作るために近くのスーパーに向かっていたが車窓からの風景に目を疑った。綺麗な緑色で彩られていた山の一部が茶色くひし形のようにになっていた。母に聞いてみると、恐らく土砂災害で削られたものだと言われた。私はその痛々しい山の表面を見て、改めて土砂災害を理解したと思った。昔からあんなに堂々とそびえていた山でも、たった数日の雨でこんなに傷つけられてしまっているのだから。

そして令和3年7月、いつも通りに暑い夏の中、熱海伊豆山土石流災害が発生した。記録的な大雨が土砂災害を引き起こし、建物136棟が被害を受け、28名の命を奪った。この当時の土砂の映像を覚えている人は多いのではないだろうか。初めてテレビで見たときは、まるで人工的に作られた映像のようで、映画だと本気で疑いたくなるほどの衝撃を受けた。土石が車も家も押しつけ壊していくその映像は、何度もニュースの中で流れたが、いつ見ても目が釘付けにされた。

私は平成30年豪雨で自分は次こそ、土砂災害・自然災害を理解したと思っていた。だけど、熱海伊豆山土石流災害で、それらを理解しきることなどできないのだと感じた。土砂災害はいつ起こるのかも、どこで起きるのかも、どこまで被害が広がるのかも、実際に起きてみないとわからない。もちろん、現代の技術でハザードマップなどが作られ、予測を立てることはできる。だが、相手は自然だ。私たちの予想をはるかに超えることだって、災害対策の穴をついてくることだってある。そう考えると、ふと自分が今まで安全に過ごせたことが奇跡のように思え、途端に美しい自然に秘められた恐ろしさが怖くなる。それでも、私たちは自然と共存しないと生きてはいけない。時に、多くの人の命をさらってしまう海は魚の命を育む、流れ落ちてくる山も生物の住処となり酸素を生み出す、洪水を引き起こす雨も作物に潤いを与える。自然は私たち生物にとって、生きていくために必要な資源を恵んでくれる存在だ。禍福の両方を持ち合わせた自然の中に、私たちは生きている。

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞  
(岡山県知事賞)

私たちひとりひとりが減災を行っていくのは難しいが、防災を行うことはできる。もしもに備えて速やかに避難できるようにバックなどを用意しておく、家の周辺の危険な場所を家族と確認する、これだけでも立派な防災になる。また、地域の避難訓練に参加したりして、周りの人とそれらを共有しておくことも大切だ。現代の私たちは完全に自然を扱いきることはできない。本文の始めに、私は自分の住んでいる町を安全だと述べたが、もしもを考えると危険となる場所は自分の家の近くだけでも5か所以上は挙がる。災害から自分の命を守るためにも、大切な人の命を守るためにも、防災に努めることが大切だ。「もしも」なんて十分に起こりえる。そのことを決して忘れてはいけないと、私はようやく理解することができたのだと思う。